書評

「訓点資料と訓点語の研究」を読む

春日政治

今春、遠藤嘉基博士の「訓点資料と訓点語の研究」が、京都国文学会から発行になり、この程その一本を恵与された。著者博士が古訓点の研究に従はれてより十余年、その渉獵された資料やこの方面の論考は、時々諸雑誌の上に発表され、諸学会に於て講演され、かつ京都大学の講義の上に、一再ならず説かれた所である。想起すれば、博士が資料探究の爲高野山への旅行には、その都度必ずかの地からの芳信をたまはり先年自分が小著をものした際は、わざわざ唐招提寺本最勝王経点についての論文を寄せて、小著の補訂をしていたゞいたこと、季刊国文学の誌上に、はた福岡国語学会に於て古訓点に関する説に接したこと等は、まだ新しい記憶である。国語学会から出た「国語の歴史」に於て、博士の受持たれた中古篇にも、この方面の一端の見えてゐたことを思ひ出す。自分は博士には少からず眷顧を受けながら、実は未だ博士の公にされた論文その他について知悉してゐないのは、甚だ禮を失する次第であるが、それだけ亦この度の高著に接し、博士の研究の全野を望むを得たと思ふ喜びはたゞではない。よつてこの夏銷暑の友として興趣深く一読する機会をもつたが、読過の感想と共に、本書を世に紹介しようと思ふのであるが、これもこの道に趣味をもつものの自然の迸りであり、かつそれが同じ道の友に對する禮でもあらうと思つたからである。只おことわりして置きたいことは、自分の今の場合は、博士の旧発表の一々には関せず一成書として表れたこの著に對して、同じ道の片端を踐んだ自分の考をいふに合せて殊に虚心にこの書を読む初学者の立場となつての感想を述べることをも許していたゞきたい。さて本書は開巻第一に、著者博士の「母の靈に」といふ言葉に接する。自分はこれを一読しておもはず目を蔽うたのである。時も時、何といふ重ねたる御不幸であらう。この著を読むに当つて、読者と共に敬んで默禱をさゝげるものである。

本書はその書名の示す如く、国語研究の爲の資料としての訓点資料（即ち点本）の成立ちを説明し、さてその用語の本質を見つゝ、その国語研究に如何に役立つかを説くのを、その要領としたものである。書題の「研究」といふ語は、博士独自の研究を意味することは勿論、それがやがて新しい研究者の研究指針を意味するものと見て差支ないと思ふ。別つて「外篇」・「内篇」とし、各篇とも三章に分れてゐるが、外篇は資料の成立ちを説き、内篇に入つて、第一章のチコト点、第二章のカナに於て、その記載様式の二大手段を詳述してある。以上が「訓点資料」の部分に屬し本書の予備門である。その第三章に至つては、訓点の実例につきつゝ、国語研究に資する実際について述べたものであつて、この部分が即ち「訓点語の研究」であり、全篇の本論でも

あり、研究の終局目的なのである。以下章段を逐うて見てゆかうと思ふ。

さて「外篇」であるが、これは先年季刊国文学誌上に発表されたものと大同であつて、自分としては一度接したことのある部分である。先づ「序」といふものがあつて、㈠「訓点資料はなぜ特殊化しているか」の問題に對して、この資料の所在が偏倚してゐること、その読解の困難であることを原因として、從つて特殊な人が特殊な分野（国語研究として極めて一部分の）に止まつてゐる情態を以て答へられた。これはたしかに言はれた如くである。これに對して㈡「訓点資料の研究ははたして特殊のものか」と反問を出されて、資料が公開され、普遍化（複製本の如きにして）し、從つて基礎的研究も進んで来れば、その資料の使用される面は国語学の全範囲にわたることが出来るといふのを理由として、この研究は決して特殊的でないと決論されてゐる。こゝで「特殊」といふ語の内容の劃然しない点もあるが、それはともかくとして、思ふに点本そのものは研究の対象として、普通の国語文とはたしかに特異性を有してゐるものであり、先づこれを読下すまでの過程がちがふ、更に言語としての実質に特異な点があり、從つてこれを研究に供する手段にも方面にも、自ら差異のあることを免れないことだけは認めてかゝらねばならない。これらをも「研究」といふ語に包括し得るならば、やはり特異性がありともいひ得るではなからうか。何人もこの研究に携はり得、国語学の如何なる部門にも使用し得ることなどは言ふに及ばない。さてこの條に於て博士が、この資料はすべてを「漢字交りの文体に読みくだして始めて国語学の資料としての相貌を現わしてくる」といはれたことは、この学には極めて大切な科條である。実に訓点研究は点本すべてを国語文として読下すこと、而もそれを正しく読下すことを第一前提とするものであつて、只片々の単語や零細な語法を拾つてゐる間は、眞の研究領域へ入つたものとはいはれないし、全然役に立たないともいはないが、研究すべてが甚だ危いものである。

さてその第一章は「訓点資料の範囲」について述べられ、漢文訓読の点本を主要資料とし、時代的範囲を鎌倉期までと定め、尚準資料として字書・音義・訓詁を出された。行亘つた注意であるが、希望が許されるならば、佛儒関係の片仮名交り文を入れてほしかつた。（これは勿論博士自身の研究には実際使用されてゐる所であるが）

第二章「訓点資料の実態」は、副題の如く資料の「記載様式の問題」、即ち加点（附訓）の手法であつて、先づ白点と朱点と、及びこれが表れる時代的先後について述べ次に仮名とヲコト点との関係を説き、次にヲコト点の実例を掲げ、更に漢字を以て字音・字訓を訓ずる手法のあることより、最後に句点・返点・重点等に及んでゐる。ここで感ずることは文例として掲げる資料が時代的にやゝ偏つてゐはしないか。殊に平安初頭の資料から、まだ豊富に採り得るものがあるのではないかといふことである。尚瑣事ではあるが、重点には一音反復の形から出していただきたく、字音・字訓の表記については、早く星点で表す手法（成実論天長点の如き）のあることを落されたのではなかつたか。

第三章「資料の価値について」は、すべ

て国語資料として、原本と転写本とについて、価値のちがふことをいひ、点本には年代明記の確実な原本資料があるが、年代不明なものも大凡そ推定出来ることについて細説されてゐる。只初めに出された「確実」といふ用語が無造作ではなからうか。下の叙述に於て始めて年代的確実とか、従つて原本的確実とかの義に取れるが、初学者には甚だ不明瞭である。本章の最後に訓点語が、口語であらうことの推定をなし、時代口語の資料となり得る意味で、訓点資料の価値を認めると言はれた。これは章題の「価値」といふ語の内容としては、やゝ単純ではなからうかと思ふ。尚博士はことわつて、こゝには「口語」といふ語の説明をいひ残されてゐる。

さて「内篇」に入る。「ヲコト点について」は、点圖の実例を挙げて、点図は何時頃出来たか、ヲコト点はなぜ発生したか(但しこれは流派的区別の理由)、及びこの手法の点を以てする起源について述べられてゐる。只著者は各点図を各々別個に発達したといふのみで、その眞の起源には言及されない。なるほどヲコト点は後世流派によつて種々別れてはゐるが、その符号様式(点・線等を以てする)は全然同一のものであるから、この手法は最初何処かで何人かによつて創始されたらうことが想像される。従つて後の各流派もその間に系統的関係をもつのではないかと思はれる。この点釈氏と儒家との関係に於てもさうである。同じ様式のものでありながら、無関係にあちこちに簇生したやうにいはれると、初学者には疑なき能はずではなからうか。

次に第二章「カナについて」は、一一については資料の補はるべきものもあらうし、考察には異説も多からうけれども、先づ初学者に対して仮名文字の発生・変遷の概念を授ける好い手引であらう。

第三章「訓点語について」は、いよいよ本書の本論ともいふべきものに進んだ。(一)「訓点語の系譜」に於ては、訓点語の属する位相といふものをあげてゐる。これは外篇以来屢〻触れて来た所であるが、こゝには更に説明に入つてゐる。先づ「かも」「かな」の論は訓点語は男女共通の時代語であるといふにあるらしく、「べらなり」の論は訓点語は男子だけの口語であるといふにあるらしい。訓点語の系譜的はた位相的特質をそれだけに考へるべきであらうか。但しこゝで前述の「口語」といつた語の内容は与へてもらつたが。

(二)「語彙」の部分には、訓点語彙には古語的性格のものがあるといはれたのは、無論のことであるし、従つて古語の解釈に役立つことを説かれたのも無論のことであるが、この事は亦語彙にのみ限つたことではないであらう。因みに「さいまくる」考に於て、金剛般若経集験記点の文例二つを引かれ、前の字の訓サキマクリを取つて論を進められてゐるが、これも本文を一往読み下して(推読でもよい)、サキマクリの入る文の前後関係を見た方が、一層よく意味の解釈を妥当に導くものではなからうか。尚ミサヲの論に於て、大矢博士の「仮名沿革史料」を引かれてあるが、あの文は自分の再調査した所によると、

精彩ニ　高リ爽ナル故ニ(摘書による)

と読まれるのであつて、彩(ウルワシとも読まれる)の字をミサヲニと訓じたのであり、事柄が彩色に関したことではない。こ

れは偶々誤つた摘書から採られた、博士にはお気の毒な禍であつた。最後の「加点の方針」では、漢字の訓法には中性的な読方と、場合に應じた個性的な読方とがあること、そして古訓点ほど場合に應じた個性的訓法が多いことを言はれてゐる。これは言はれた如くすべて肯定出来る事実である。

㈢「音韻」であるが、この條は、主として国語に固有しなかつた音の発生変遷について述べられた。先づ「撥音」の表記を字音の三内撥音別から国語のものに及んでゐる。自分は元来、古く国語になかつた撥音のやうな音が、国語の上に発生したことを字音の影響であると見る説には、未だ同することは出来ない。国語に撥音を生じた原因について、博士ははつきり言はれてゐないが、この際博士のお考へを聞きたかつたのである。「促音」についても、亦漢字の入声音の表記から入つて考へられてゐる。自分は漢字の入声（原音）は勿論のこと、その国語表記と、促音といふものとを同一に考へる人を屢々見るが、それは大きな誤であると思ふ。国語の促音は、後続音の如何によつて起る現象であるし、古来漢字の入声音の日本的表記には、その字単独では決して促音になつたものはないからである。「長音」では国語の長母音の表れる跡を、訓点の上に例を尋ね、音声的考察を加へ、字音の長音のことにまで及んでゐるのは周到である。「拗音」では、先づ字音に於けるヤ行拗音・ワ行拗音の表記及びその発音を時代的に観察したもので、訓点語がこの研究に役立つことを述べられた所、要を得てゐる。只こゝには拗音の直音化（国語化）した例を少し出していたゞきたかつた。尚「字音とアクセント」の事にまで及んでゐるのは、博士の研究の手廣さを思はせる。「兼好の言語観」は拗音に関しての附論であつて、面白い考察であるが、これにはまだ反対論者もありさうである。

以上「音韻」の條は、所謂音便といふ名で考へられてゐる非固有音を中心として述べられてゐるが、自分の希望を言へば、アヤワ三行混同の事、ハ行音のワ行音転化の事があつてほしかつた。このことは国語音韻の上には大きな事実であり、又訓点が屈強の資料を供給すると考へるからである。

㈣「語法」も可なりの紙数を用ゐられたが、重点主義を取られたといふから、相当省かれたものがあつたやうである。先づ序として書かれた、助詞イと動詞のク語尾との考察は、只仮名文学語にないとか、男子語であつたとかいふに止まるならば、語法も亦他と同じくさうしたものだといふに過ぎず、特に語法の序としてはやゝくどさを感ずる。イやク語尾を実例として出すならば自らその場所があらうと思ふ。この條にク語尾の説き方について自分の説の事が出てゐるから、次手に述べさせていたゞくが、あの形をク・ラク二元に考へたり、つゞく上部を活用形として区々に考へたりすることは抑々文法的歸納として甚だ幼劣であつて、自分の頭には到底堪へられない。ク一本立て、連体相当一本立てで、すべてが攝せられるほど便利な法則はないと信じ、この見方を再考する余地は、自分には絶対にない。

さて「動詞」については、訓点語には活用の古語的性格の色濃いこと、活用の種類の歴史的変化等のことをいひ、又男女別とか古今別とかいふことを附記してある。「形容詞」には訓点では已然形の表れるこ

との少いこと、ケク形がなく、ケム形の少しあること、活用するケク形もあまり見えないこと等を、実例について述べられた。こゝでも古語・今語の比較が行はれてゐるが、少し想像の勝ち過ぎる傾はないであらうか。「形容動詞附連体語」に於ては、字音語のナリ形のことをいひ、後世タリ形になるものも古くはナリ形であつて、タリ形の生ずるのは比較的後であることを実証し、連体語のアル(或)、アラユル(所有)、更にイハユル(所謂)等を古訓点の上に見て、今人は知らないアラム、アラルル、アラレム、アラエムなどの珍らしい形を示してくれられた。「助動詞」では所謂時の助動詞、使役・推量・指定等の動詞について、訓点語上の特質、用不用等のことを述べられてゐる。これらの細部については言ひたいこともあるが、この程度の批評には長引きすぎる恐れがあるから、すべて省略する。只この條に出た、受身ルの古用ユについて引かれた石山点本の二文例は、只捻の字の訓だけをつけずに、全文を読み下して(推読でよい)いたゞいて、ツマエ、ツマへの中、意義上エが正しくて、而もそれは受身であることの確証が望ましい。尚この語法の條には助詞を入れてほしかつた。以上「語法」の部分は、総じて品詞の論考であるが、これに対して文章としての観察にやゝもの足らなさを感ずる。訓点語が一種の飜訳である点に、文章としての特性のあらうことが考へられるし、吾等はその事を知りたいのである。しかしこの事は今後の研究に待つべきかも知れない。

㈣「訓点語の性格」は本篇の結尾として、訓点語そのものの特質を総括したものである。只小さい希望をいへば、これと共にこの資料の用途に於ける特性の総括を加へてほしかつた。ことに国語文献に加へられた、いはばこの新しい資料が、国語研究に対して如何なる新方面を開拓し得るか、その今日までの業績の程度、並に将来に向つての予望等についてである。

最後に全巻を通じての附言として許していたゞきたい一つは、所用の資料がもう少し時代的に偏倚しないやうにありたいことである。たとへば訓点としては比較的後代の、しかも特異な資料だけを重要視し過ぎると、古い時代のよりよき資料を顧みなかつたり、従つて前人のより適切な研究をよそにしたりする弊に陥るのである。更に資料の提示には、なるべく時代的の考慮を拂はれたいことである。これを無造作にすると、史的観察が疎かになつてゆくのではなからうか。

凡そ従来の訓点研究は、具体的な点本を捉へて、この本にはかくありといふ、事実の記述的研究であつて、それに多少歴史的に前後に推及んだり、比較的に左右をかへり見たりしたに過ぎない。それがこの学の基礎を作りつゝあることは勿論であるが、この学はまだ総説的・概論的にいひ得るほど、眞のまとまりが出来てゐない。しかるに博士のこの著は已述のやうに、著者自身の研究を表したるものであることは勿論、全面を概論的に組織立て体系づけられた試みを重しとしなくてはならない。この意味に於て眞に新しい著述の公表であると言つてよい。必ずや後学の爲に好個の指針となることは言ふを待たない。この紹介に挿んだ小質疑の如きは、もとよりこの著の軽重をなすものではない。遠慮をおかない妄言のほどは、野人の常とお見許しを乞ふ次第である。学界の爲切に博士の御自重をいのる。(昭和二七・八・三一稿)

——九州大学名誉教授・文学博士——